

雑誌研究の方法と課題

中川 裕美

要旨

雑誌研究について、雑誌というメディア媒体の特性を踏まえながら、研究の客観性を実現するにはどのような分析枠組みが必要となるのか、その課題について検討した。1「何故その"雑誌"なのか」、その雑誌を研究することの意義の明確化だけでなく、発行部数、対象読者などの基礎的情報も明らかにすることが重要である。2「雑誌の"何を"分析の対象とするのか」、テキストなのか、図像なのか、といった問題。さらには「雑誌自体」を論じたいのか、記事内容から「当時の社会」を論じたいのか、という研究の方向が重要である。3「"読者"とは何か」、読者投稿欄から読み解けるものは、研究者が望むような「フラットな読者像」ではあり得ない。真の読者像を把握するためには、資料調査、フィールド調査といった方法の併用も必要であると考えられる。4「雑誌研究をする"立場"とは何か」、分析の対象が「もの言わぬ資料」であるからこそ、我々研究者の側が、自己の価値観や立場にどれだけ意識的、自覚的であるのかが重要である。

1. はじめに

筆者は、これまで「少女」を論じる手がかりとして雑誌メディアを主な分析の対象（媒体）とするテキスト研究を行ってきた。雑誌というメディアの歴史は古く、明治時代初期にはすでに現在の形態に似た雑誌が発行されていた。明治10年代に入り発行される雑誌の種類が多くなっていくと、次第に雑誌の専門化が起こっていく。その先駆けとなったジャンルが婦人雑誌と少年雑誌である。筆者が主な分析の対象としてきた「少女雑誌」の登場は、明治中期まで待たねばならない。それまで大人の女性を対象とした婦人雑誌と、男子を対象とした少年雑誌の間で、行き場を失っていた女子読者を獲得するべく生まれたのが少女雑誌であった。我が国最初の少女雑誌は、1902（明治35）年に金港堂書籍から創刊された『少女界』である。女子に対する教育制度の拡充と、それまで隅に追いやられていた女子向け雑誌の登場という期待を背景に、『少女界』以後、数多くの少女雑誌が創刊されていった。そして少女雑誌という一大メディアは、戦中、占領期、高度経済成長期などの社会状況に左右されながら、現在まで継続して発行されていくこととなった¹。

言うまでもなく、メディアを分析対象とする研究は数多くなされており、その中でも「雑誌」メディアの研究も近年盛んに行われるようになった。しかしその分析手法は確立されたとは言いがたく、問題点も散見出来る。

そこで、本稿ではこれまでの筆者の経験を踏まえた上で、雑誌を分析する際の問題点や注意点などを整理するとともに、雑誌研究をする立場について、研究者が自覚すべき問題を指

摘するものである。

2. 何故その「雑誌」なのか

雑誌を分析の対象とした研究において、最も重要なことは、「何故その雑誌を分析の対象としたのか」が明白でなければならないという点である。同時代に発行されている雑誌の全てを分析することは物理的に不可能であり、研究者は何らかの基準をもって分析の対象を定めることから始めなければならない。当然、研究に目的と分析対象の整合性が第一に重視されるべきであるが、その他にも次のような点が明確である必要がある。

- (1) その雑誌の発行部数
- (2) 主な読者対象
- (3) 同時代に発行されていたその他の雑誌ではない「理由」

これらの点は何故重視されなければならないのか。それは、分析の対象として定めた雑誌が分析の対象として妥当か、という点に注意を払う必要があるからである。例えば、雑誌の分析から時代性を読み取ろうとした際に、非常に少数しか発行されず、また数号で廃刊となった雑誌を対象とするのは果たして妥当であろうか。研究の目的をどのように定めるかにもよるが、その時代を象徴するような大部数が発行されていた雑誌を選ぶ方が、影響力という点において「時代性」を読み解くには適当であろう。

しかし、必ずしも大部数の雑誌でなければならないということではない。つまり、発行当時は少数しか発行されなかったが、その雑誌が、ひいてはその言説がその時代にすでに現れていたことに意味がある場合である。すなわちその雑誌の先駆性が歴史的意義を持つということであり、この点を重視するのであれば、発行部数も発刊数も重要ではなくなる。

また、どのような読者がその雑誌を読んでいたのかにも注意を払う必要がある²⁾。何故なら、雑誌の読者層は編集方針と不可分に関わる要素であるからである。編集方針は他誌との差異化を図るものであり、すなわち(3)の何故その雑誌を分析の対象としたのか、という問題へと接続していく。

雑誌研究においてどの雑誌を選ぶかという問題は、分析の対象を何にするか、という以上に、これから始める分析結果を大きく左右する重要な問題であると言えよう。稀に先行の研究者や熱的な愛読者らによって、雑誌が「価値付け」されてしまっている場合がある。戦前期に少女雑誌を例にとると、発行部数を考えれば戦前期の少女雑誌を代表するのは『少女倶楽部』(大日本雄弁会講談社)であるが、実際には『少女の友』(実業之日本社)の方が多くの研究がなされている。これは『少女の友』が挿絵画家の中原淳一や、作家の川端康成や吉屋信子といった著名な作家の作品が掲載されていたことが一つの理由にあげられるだろう。彼らの作品は画集や展覧会、復刻本の発行がなされ、「戦前期の少女雑誌」を代表する作品群として取り扱われている。こうした取り組みは評価されるべきであるが、雑誌メディアを分析する立場からすると、「当時」の価値観と「現在」の価値観を混同するべきではなく、発行部数などの客観的なデータによって雑誌を捉える必要がある。

本格的な分析に入る前に、同時代の出版状況や主要雑誌の編集方針を調査すること、更には複数の雑誌の試分析を行い、研究の目的に対して対象雑誌が適しているのかを確認することが重要である。その際、雑誌の編集方針には欠かせない社史の存在にも目を配る必要がある。戦前期の出版社は社史を発行していない、または発行したが残っていない、ということがある。社史はその出版社がどのような理想や思惑を持って雑誌を発行したのかを把握するのに有効であり、実際に編集に携わった編集者を知ることが出来る極めて貴重な資料である。編集者の名前が分かれば手記や回顧録へと辿り着くことも容易となる。

最後に、その雑誌が「どこで」「どれぐらい」読むことが出来るのか、という確認も重要である。

雑誌研究を行う研究者にとって最も厄介な問題なのは、「雑誌はどこで読むことが出来るか」ということである。現在では、国会図書館において雑誌も所蔵の対象となっているが、そうした措置がなされるようになったのは近年のことである。特に戦前期に発行されていた雑誌となると、欠号があるだけに留まらず、未だに創刊号すら発見されていない雑誌も数多くあるというのが現状である。また所蔵している図書館が全国で一館しかない、というのも珍しい話ではない。分析の際には雑誌の複写が必要不可欠な作業となるが、貴重な資料も多いため複写が認められないという場合もある。

筆者の経験では、戦前期の雑誌で一号の欠号もなく一般公開されているものはない。また資料調査にあたっては、複数の図書館を横断的に利用するのが基本である。筆者が最も利用したのは大阪府立中央図書館内の国際児童文学館であるが、この他にも神奈川近代文学館、近代日本法政史料センター、三康図書館、梅花女子大学などを利用し、資料調査を行った³。しかし、『少女の友』は所蔵図書館が極めて少なく、創刊号は未だに公共図書館では公開されていない。『少女の友』よりは所蔵数が多い『少女倶楽部』も、戦時下に発行されたものについては欠号が多い。

分析の対象とする雑誌が、どれだけ公共図書館に所蔵されており、公開閲覧がされているのかを確認することは、雑誌研究の第一歩である。

3. 雑誌の「何を」分析の対象とするのか

雑誌の分析をするといっても、その対象は様々である。以下に分析の対象例を列挙する。

- (1) 小説、マンガなどの作品
- (2) 署名記事、論説など
- (3) 表紙絵、写真など
- (4) 広告
- (5) 読者投稿欄
- (6) 雑誌編成（目次）など
- (7) 附録

(1)(2) は言説分析から雑誌を読み解いていく際に有効であり、雑誌研究の多くがこれらを

分析対象としている。

(3) はビジュアルイメージの分析に多く用いられている。特に表紙絵は雑誌の顔であり、その意味において雑誌そのものであると言っても過言ではない。表紙絵を担当している作家は誰なのか。人物だけでなく、背景や小物などには何が描かれ、どのような文字が書かれているのかなど、表紙絵からは様々なメッセージを読み解くことが可能である。

(4) は、雑誌の社会的位置づけを明らかにする際には有効な分析対象である。特に雑誌の広告は決まった位置に入れられていることが多く、時代的変遷を捉え易いという利点もある。

(5) の読者投稿欄の分析も、雑誌研究においては数多くの先行研究がある。読者がどのように雑誌を読んでいたのか。また読者同士のコミュニケーションの場として、読者投稿欄が果たした役割は何だったのか。特に、インターネットが普及する以前の読者投稿欄の機能は、現代のソーシャルネットワークの先駆けとも言える役割を果たしていた。その意味において、戦前期の雑誌研究に欠かせないのが読者投稿欄の分析であると言えよう。

(6) は、これまで述べてきたような個別の記事を分析対象とするのではなく、雑誌全体を一つとして捉える研究である。一つの雑誌の編集方針や誌面変遷を明らかにする際に有効であり、割かれているページ数や記事編成を客観的なデータとして明らかにすることが出来る。

最後の(7)は、雑誌文化を考える上では欠かせない分析対象である。戦前期から雑誌の附録は作られていた。愛読者の中には、当時の附録を今も大切に残している方も少なくない。特に子ども向けの附録は、大人向けの商品を模倣して作られたものや、時代性を反映したものも多い。また後の大作家となる作家が描いた小冊子も多く作られており、出版史や作家論という面からも価値のある附録もある。

このようなことから、附録は雑誌の「おまけ」以上に意味のある分析対象と言えるだろう。しかし残念ながら、附録という機能からその多くが散逸してしまっており、残存するものは極めて少ない。また附録を積極的に収集・保管している公的図書館はなく、分析をしようと考えたとしても、一部の愛好家や美術館、博物館などの所蔵品に頼らざるを得ないのが現状である。こうした点から、附録は決して全ての研究者に開かれた分析対象ではないが、雑誌を研究する上では欠かせないと言えるだろう。

4. 分析対象の選択

雑誌の分析にあたっては、研究全体の目的・視点によって、対象とする雑誌の発行時期・期間をいかに定めるかも重要な要素となる。

例えば、特定の雑誌自体の変遷を明らかにしようとする場合、発行者や編集者の推移、発行部数の動向と言った面を重視して、対象期間を設定する必要がある。一方、雑誌のメッセージの分析を通じて社会全体の変化をとらえようとする場合、時代のエポックメイキングとなる社会的な事件や状況などを基準として、対象期間を設定する必要がある。また、後者のばあいでも、具体的な時代の転換点にばかり着目して対象期間を設定すると、メディアが可能性として内包している時代の先見性を見逃してしまう危険性もある。

分析期間の選定は、その設定の段階で研究の結果をも左右しかねないのである。

分析の対象が確定したら、次に考えなければならないのが「どれだけ分析するか」という

点である。特に雑誌のメッセージ分析を行う際には、データ収集の段階での偏りを最小限とするためにも、全号を分析の対象とするのが望ましい。ところがすでに述べたように、多くの雑誌は全ての号を確認出来るものは少なく、奇跡的に全号を分析出来たとしても、時間的、金銭的な制約によってそれが叶わないことも多々ある。また全号を分析の対象とすることでデータが膨大となり過ぎ、結果として特定のメッセージを読み解くことが困難となる場合もある⁴。

そこで分析者は次の二つのどちらかを選択することになる。それは、(1) 分析の期間をさらに絞ること、(2) 決められた号だけを分析の対象とする抽出分析を行うこと、である。

抽出分析は、例えば全ての発行既刊の1月号のみを分析の対象とする、といった方法である。先に述べたような恣意性が問題にされることもなく、また全期間を分析の対象に出来ることから、限定的ではあるもののメッセージの経年変化も明らかにすることが出来る。この意味において、抽出分析は選定分析に比べて利点が多いように感じられるが、当然問題もある。

第一には、欠号によって決められた号を確認出来ない場合である。1月号が欠号していたために2月号を代わりに分析の対象とする、といった代替措置も出来るが、そうすると分析枠組みが揺らぐことにもなりかねない。また戦前期の雑誌では、数年に渡って欠号が続いているということも珍しくはない。

第二に、何月号を分析の対象とするのか、という設定が問題になる場合がある。雑誌において1月号というのは、新しい年の編集方針を表明する特別な意味を持つ号であるが、学齢別雑誌になると、そうした役割を果たしているのは1月号ではなく4月号となる。戦前から戦後という長いスパンで発行され続けた雑誌では、各号の意味付けが途中で変わっていることもあり、分析枠組みの設定は困難を極める。筆者も実際、同様の指摘を編集者の方にされたことがあり、複写した資料が分析に適さなかったことがある。

雑誌研究に限らず、人文系の研究であっても出来る限り恣意性を排除し、客観的な分析とデータ収集をするのが理想である。雑誌というメディア媒体が持つ問題を踏まえながら、研究の客観性を実現するにはどのような分析枠組みをしていくべきなのか。雑誌研究を行う研究者の課題であると考えられる。

5. 「読者」とは何者か？

多くの研究者は読者が雑誌を「どのように」読んでいたのかを明らかにしようとする際、読者投稿欄を分析の対象とする。読者投稿欄が読者分析に有効であることは先に指摘した通りであるが、実はそこには「ある一定の」という前提が必要となる。何故ならば、読者投稿欄に現れている読者像には、次に述べるようないくつかのバイアスがかかっているからである。

第一に、読者投稿欄は編集者の意向が働いているものである。多くの読者投稿の中から選ばれて掲載された手紙は、編集者が望む内容が書かれていたものであると推察出来、またそうである以上、読者の側も「編集者に選ばれやすい内容」を投稿した可能性がある。

第二には、読者投稿欄に「読者からの投稿」として掲載された手紙が、本当に読者が書い

たものなのか、という問題である。例えその投稿が、編集者によって書かれたものだとしても、我々研究者の側からは判別することは出来ない。

第三に、編集者によるバイアスや投稿の真実性に目をつぶったとしても、読者投稿欄に投稿をする読者は、雑誌の購買層の中では極めて能動的な読者であり、それを一般の読者層と捉えることには問題がある。読者投稿欄に投稿をしない「もの言わぬ読者」の方が、読者全体にとっては大多数である。更には投稿の経験の有無を、雑誌の愛読度を計る指標にすることも出来ない。

以上のことから、読者投稿欄から読み解ける「読者像」は、研究者が望むような「フラットな読者像」ではあり得ず、読者投稿欄からのみの読者像の把握は極めて難しいと言える。では雑誌がどのように読まれ、また読者にとってその雑誌がどのような位置づけであったのかを明らかにする方法はあるのだろうか。この課題を克服するために筆者が必要であると考ええるのは、読者投稿欄の分析に加え、以下に述べるような調査・分析を行うことである。

読者像の調査方法には、資料調査と、フィールド調査という二つのアプローチがある。

資料調査では、当時を知る者の手記、日記、回顧録、手紙、小説、インタビュー記事などの分析があげられる。特に実際に編集に携わった編集者の手記や回顧録などは、当時の雑誌と読者、雑誌と編集者、出版社と雑誌、作家と読者などの関係性を読み解くことが出来る、最良の資料である。同様に、雑誌の読者だった子ども時代を振り返った日記や回顧録などからは、その著者にとって雑誌がどのような存在であったのかを知ることが出来る。

こうした資料は、当時を知ることが出来る資料として著名なものもあれば、日記の一部分で触れられているだけのものまで多様である。筆者自身、偶然読んだ回顧録の中に、雑誌の思い出話が記されている部分を発見した経験もある。また、手紙や日記などは出版されていないものも多く、埋もれたままとなっている資料も数多くあるだろう。そういった資料の発掘も、雑誌研究の一部と考えるべきだと筆者は考える。

次に、フィールド調査からのアプローチである。実際に雑誌を読んでいた読者や編集に携わった方、作家へのインタビュー調査を行うことで、実態としての読者像に迫ることが可能となる。もちろん調査によって得られた情報は、美化や記憶違いといった危険性を孕んでいるが、資料からでは得られない貴重な資料であることは間違いがない。また、現在発行されている雑誌を分析対象とした場合、「生の現場の声」を知ることが出来るという点もフィールド調査の良い点である⁵。

これまで雑誌研究者に限らず、資料研究者は資料調査に重きを置くことが多く、生の声を調査の対象とすることは少なかった。近年、そうしたこれまでの反省を踏まえ、編集者や作家へのフィールド調査を資料調査と同時並行で行う研究者も増えてきた。当時を知る貴重な声は、資料を読み解く以上の説得力を持つものである。特に戦前期から戦後直後に発行されていた雑誌の関係者の多くは高齢であり、速やかな調査が望まれる。

インタビューだけでなく、アンケート調査を行うことで読者の読書体験を明らかにしていく方法もある。例えば、特定の集団に対し雑誌の読書調査を行い、アンケートの結果を元に個別のインタビュー調査を行うことで、よりパーソナルな読書体験に迫ることも可能になるだろう。

しかし注意しなければならないのが、こうして得られた「生の声」が、必ずしも真実であるとは言い切れない、という点である。過去の美化や、記憶違いも当然あり得るからである。そうした問題を補完するのが資料の分析である。すなわち、読者像に迫るにはいくつかの方法があり、そのどれもがそれぞれに利点と欠点を持ち合わせ、完璧な調査方法というものはない。しかし、複数のアプローチを用いながら、多面的に読者像を浮き彫りにしていくことは可能であり、そうした作業の積み重ねが「実態としての読者像」へ迫る一つの方法である。

6. 研究する「立場」とは何か

最後に、雑誌分析をする「わたし」の位置づけについて述べる。

研究活動として資料分析を行う場合、我々研究者は「何者でもないわたし」として分析対象に対峙するのが一般的である。すなわち、人種、性別、社会的な立場などに縛られない価値観で資料に臨み、出来る限り客観的な視点から資料に隠されたメッセージを読み解いていくのが理想である。何故ならば、そうした視点によって明らかとなった結論は普遍性を持つからである。ところが実際には、実態としての「わたし」から遊離した「何者でもないわたし」を設定することは不可能であり、自己を構成する価値観から完全に解放されることはあり得ない。

また、「現代に生きるわたし」が「過去の資料」を「今の感覚」で読み解いていくことには、常にいくつかの危険性がつきまとう。例えば、ある資料を読み解く際に、出来る限り「当時の感覚」を再現しながら読み解いていくべきなのか、それとも「今」「現在」に生きる者として読み解いていくべきなのかという問題は、結論を大きく左右するという点においても重要である。当然、「当時の感覚を再現することなど不可能である」という考えもあるだろうが、そう言い切ってしまうのは、資料研究をする上では些か問題がある。何故ならば、我々研究者は資料を通して、それが書かれた時代や社会、文化を論じようとしているのであり、「当時の感覚」の否定は研究の根幹を揺るがしかねない。

また、過去の資料から発見したイデオロギーを研究の成果として公表することに対する自覚と責任についても、我々研究者は自問しなければならない。歴史の中に埋もれた資料を掘り起こすという作業は、人文系の学問において重要な役割である一方、研究者の思惑とは無関係なところでその成果が利用される危険性も孕んでいる。筆者が主催していた研究会において、明治期に発行されていた少年雑誌『日本之少年』『少年世界』（博文館）から中国人表象に関する言説を抜き出し、そのイデオロギーを明らかにするという研究発表がなされた。その際、「負のイメージ」を抜き出し、研究という手法で公にすることに対して、研究者自身の責任をどう考え、そして向き合うかという質問がなされた。もちろんこの問いに正解はない。しかし、常に資料研究者が自問しなければならない問いであると筆者は考える。何故なら、「生の声」を研究対象とするフィールド研究者ならば、「研究者であるわたし」が「分析対象」とどう向き合うかという問題は、研究の初期段階で否応無しに直面するからである。分析の対象が「もの言わぬ資料」であるからこそ、我々資料研究者は、この問題にどれだけ意識的、自覚的であるのかが重要となってくる。

7. おわりに

以上、雑誌研究の手法が持つ注意点や課題について述べてきた。対象雑誌の選定、分析対象の絞り込み、読者欄の分析の有効性、史料調査とフィールド調査との融合など、いずれも雑誌を研究する者にとっては基礎的な分析手順の整理と言えよう。だが、こうした基礎的な分析手順を整理することによって、雑誌研究者の間で分析手法が体系化され、共有されていくことが望まれる。個々の事例研究に過ぎない雑誌研究が、発行されていた時代やジャンルを越え、社会研究としての存在感を示すようになった時、我々雑誌研究者は更に普遍的な社会研究への貢献が出来るようになるからである。

資料研究は、フィールド研究のように「今」「ここ」の社会問題を対象にすることが出来ないため、常に現実との「時間差」が生じ、目の前の課題に即応するような成果は得難い。資料研究がもつ固有の意味・価値とは、目の前の人間や揺れ動く現実世界からは捉えられない「歴史」や、再生産され、記号化されていく「文化」、更には無意識のうちに甘受してしまっている「イデオロギー」などを、時間・時代を超えて深く掘り下げ、分析することが可能である、という点にあるはずである。

資料研究が内包している課題を否定的に捉えるのではなく、我々研究者が克服していくべきものと捉えたい。

謝辞

なお本稿は、2014年10月に行われた日本出版学会・関西部会「出版史研究の手法を討議するその3：文化・社会研究としての出版研究を目指して」の発表の一部に大幅加筆したものである。例会における討論を通して多くの示唆を得ることが出来た。発表の場を与えてくださった中村健先生（大阪市立大学）、芝田正夫先生（関西学院大学）を始め、関西部会に参加された全ての皆様に御礼申し上げる次第である。

注

- 1 少女雑誌の歴史については、拙著『少女雑誌に見る「少女」像の変遷』（2013）参照。
- 2 戦前期の少女雑誌を代表する『少女倶楽部』と『少女の友』については、ともに多くの先行研究があるが、発行部数では圧倒的に『少女倶楽部』が勝っており、その意味において戦前期を代表する雑誌は『少女倶楽部』と言える。しかし、回顧録や少女小説の復刊などで取り上げられるのは、ほとんどが『少女の友』であるというのが現状である。それは、『少女倶楽部』の発行元である大日本雄弁会講談社が教育的な色を全面に押し出した編集方針を採っており、『少女倶楽部』もまた、その方針が貫かれていたことによると思われる。教育的な色合いは誌面にもよく現れており、読み書きや計算、作文といった記事が掲載された。こうした編集方針を好んだのは学校の教師や親たちであり、『少女倶楽部』の発行部数を支える基盤として機能していたと考えられる。一方の『少女の友』は、圧倒的な発行部数を誇る『少女倶楽部』に対抗するべく、読者である少女が望む娯楽を多く掲載していった。宝塚や芸能、中原淳一をはじめとする華やかな挿絵で読者を引きつけるとともに、ファッションや小物などでは都会的な色を強く打ち出した。このような編集方針は、最終的には1938年から始まった児童読物に対する出版統制の対象となり、『少女の友』は急速に国策雑誌化していくことになる。『少女の友』が辿った運命は、当時の読者の心を引きつけ、雑誌が色褪せた後も変わらぬ愛着となっていったことは想像に難くない。このような背景を踏まえた上で、再度、戦前期を「代表する」少女雑誌は何かを考えてみると、この問題が非常に複雑であることが分かるだろう。『少女の友』が「戦前期の少女文化」のひとつを形成し、当時の少女に影響を与えたことは明白であり、こうした役割は単純な発行部数からだけでは読み取ることは不可能だからである。しかし、だからといって『少女倶楽部』を体制的であったからと退けてしまうのも乱暴である。全ての『少女倶楽部』の読者が、教師や親からの命令によって生まれた受動的な読者であったと結論づけることは出来ないし、当然、そうした証拠もないからである。以上のように、雑誌の社会的な

影響力と、雑誌の編集方針は不可分な関係にあり、雑誌研究者はそのどちらをも視野に入れながら、普遍的かつ客観的な指標を設定することが重要となる。

- 4 第三の問題として指摘出来るのが、費用の問題である。雑誌研究における理想は、「全ての号」「全ての記事」を「漏れなく」分析の対象とすることであろうが、実際の作業を考えるとそれはほとんど不可能に近い。最大のネックとなるのは「費用」である。本文中にも述べた通り、史料のほとんどは一般図書館所蔵ではない。そのため複写代が一枚 30 円、場合によると一枚 100 円というところもある。特に学生や院生といった費用に制限がある立場の場合は、複写代は重くのしかかる。また居住地によっては調査費も重なることになる。実際、筆者も修士研究の際には全号分析は出来ず、結果として 1 月号のみの抽出分析を採ったが、結果は満足出来るものではなかった。
- 5 筆者が少女雑誌の研究を始めた頃は、インターネットにおける横断検索システムはまだ現在ほど網羅されていなかったため、対象雑誌の欠号表を自作し、専門図書館に赴いて司書の方に「この号を所蔵している図書館はありませんか」と確認をして調査を行った。そこで紹介をされたのが、後に筆者の研究に大きな影響を与えることになった、『少女クラブ』の編集長をされていた丸山昭氏であった。こうした出会いはインターネットの検索からでは決してあり得ない「生」のものであり、史料研究とフィールド研究は決して断絶している訳ではないことを示す好例であると考えられる。